

## 会見内容

午後1時30分 開始

【広報広聴課長】 それでは、今年初めて、1月の市長定例記者会見を始めたいと思います。

進行につきましては、お手元に配りました次第によって進めたいと思います。

初めに市長あいさつ。次に事業等の発表。事業等の発表については2つほどありますので、発表の後、それについて質問を受けたいと思います。それから3番目に質疑応答というところでお願いします。

市長お願いします。

【市長】 それでは、新年明けましておめでとうございます。

比較的穏やかといいますか大変大雪ということで心配したんですけども、市民生活にとりましてはそう大きな支障が出ることなく、極めて良いお正月が迎えられたのではないかなというふうに思っているところであります。

昨年は、市民の皆さん方、また記者クラブの皆さん方に大変お世話になりまして、いろんな良い事業も進捗もいたしたというふうに思っております。まだまだたくさんの多くの課題が残っておりますので、今年も気を引き締めて頑張っていきたい、このように思っております。

特に新幹線の問題につきましては、年度中、19年度中にいろんな結論が出るやに聞いておりまして、今後とも運動展開をしながら敦賀までの認可が得られますように全力で頑張っていきたい、このようにも決意を新たにいたしているところであります。

また、港の元気は敦賀の元気につながるということを確認いたしておりますので、何とか新しい港も一部供用が開始されます。良い新航路ができますように、また外国との、特に中国との航路の復活も含めまして多くの船が出入りをする港にしていきたいな、このようにも思っております。

それと、拠点化の中での連携大学の構想、これも何とか物にしたいというふうに思っております。今後ともそういう大きな課題をしっかりと踏まえながら、また現実的には市民生活いろんな諸問題ございますので、今日も職員の皆さん方にもお願いしましたけれども、ネズミのように細かく動き回って情報を収集して、市民の皆さん方にもいろいろお応えができる、そのような体制で今年しっかりと頑張っていきたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。

あと、座りまして、式次第に従いまして説明させていただきます。

まず事業の発表ということでございますけれども、ご承知のとおり防災センターが完成しまして、一部使おうとしておるところでございます。消防指令センターの運用がこれも10日に始まるというふうに聞いております。それと、災害緊急放送の協定の調印式を1月19日に行う予定であります。土曜日、大安ということでありますけれども、119でありまして、非常に救急と縁のあるごろ合わせにもなった日でございます。10時から式典、神事初めそういうものを順次行っていきたい、このように思うところでございます。

続きまして、新しい検査制度に関する説明会でございます。これは国のほうにお願いをしておりましたけれども、国が前へ出て説明をしてほしいということでお話をしておりました。それと、一般の市民の皆さん方を対象に行うものですから、分かりやすい説明をということでお話をしていたところでございますが、これも1月25日の金曜日でありますけれども夜の7時からプラザ萬象の小ホールで開催をするということでございます。主催は、ご承知のとおり原子力安全・保安院のほうの説明をしますし、説明者は福島首席統括安全審査官が行うようでございます。

そういうものを開催するということでありまして、1月はとりわけ大きな事業もありませんので、発表はこれだけでございます。あとはまた質問に応じてお願いします。

【広報広聴課長】 この2つの事業について質問がありましたら、お願いします。

【市長】 それと、先ほどちょっと触れましたけれども、災害緊急放送協定の調印式とい

うことでありますが、これは相手は敦賀FM放送株式会社でありまして、FM敦賀の中で、災害が発生した場合に、敦賀市と災害対策本部からの情報を市民の皆さん方に提供しようという協定でございます。

ラジオでありますので、外出先でも車の中でも聞けるということで、非常にそういう点では幅広くこういう情報を提供できるのではないかと。今まで私ども、ご承知のとおり家庭ではRCN等々緊急放送を持っておりますけれども、あれは家の中にいないと見れない。ワンセグも出ておりますけれども、あれはアナログ放送ですから入りませんので、そういう点でFMがいざというときには大きな効果を発揮するのではないかとということで調印をするということでもあります。

以上です。

【記者】 明けましておめでとうございます。

センターなんですけれども、運用自体は1月10日でよろしいですか。始まるのは、もう始まっているんですか。

【市民生活部長】 もう既に今日から私どもの防災の担当は向こうに移っております。電話の切り替えもされております。今市長が申しましたように、消防のほうについては10日から指令台が動くということでございます。

【記者】 電話番号の切り替えは、たしか19日だったような気がするんですけれども。消防のほうですけれども。じゃ19日に特に何かあるというわけではないんですね。式が19日にあると。

【市長】 式典ですね。

【記者】 それと放送なんですけれども、こういった協定みたいなものは電波のほう、ラジオのほうと結ぶというのは初めてなんですか。

【市長】 ラジオは初めてですね。

【市民生活部長】 福井県内では3番目になるかと思えます。福井、鯖江がやっております、私どもが3番目になるということです。

【記者】 敦賀市としてというのは初めてということなんですね。

【市民生活部長】 おっしゃるとおりでございます。

【記者】 新しい検査制度についてですけれども、今現在の市長のお考え、導入について賛成か反対か、まずお聞かせ願えますでしょうか。

【市長】 検査制度につきましては、全原協全般から意見をいろいろ聴取しますと、やはり全体的にはまだ説明をしてほしいと。要するに私どもとすれば、まず安全にいかにつながるかが第一であります。要するに、検査制度を逆に見直しをして、より安全になれば見直すことには反対はしません。それと、間隔が延びるという1点だけをとらえると、それで大丈夫かなという心配があるんですけれども、そのあたりについては、私の聞く限りでは運転をしながら、運転をしているときにも検査をしたほうが良い、また運転中のほうが検査しやすい箇所もあるということでもありますから、そういうものにつきましてはそれも一理あるかなというふうに思っております、検査制度が見直しされることによってより安全に近づけば、私は直してもいいというふうに思っております。

ただ心配される部分では、極端な話、要するに24カ月になる。定検の期間が非常に間が空いてしまう。そうなった場合の今までのいろんな経済的な問題も出るということも確かでございますので、そのあたりの経済的なものも最低でも今の基準をいろんな形でクリアできて、そして安全性がより新制度によって増せば、反対する理由はないというふうに思っております。そのあたりをよく市民の皆さん方に説明をしていただくべきだというふうに思っております。

ただ全原協全体とすると、やはり単に延ばすという観点から、経済性を追求するがゆえにそういうことを言っているのではないかと懸念もございまして、そのあたりしっかり見極めていく必要があります。現時点で賛成だ、反対だということは、私自身も思っております。期待するところは、より安全性を目指した検査ができる検査制度であれ

ばなというふうに思っております。

【記者】 いろいろ判断を下すとか、そういう時期も全然今のところは考えていらっしゃるんですか。

【市長】 まだ全くありません。

【記者】 あと、去年、美浜の町民の住民説明会で地域振興を求める声がかなりあったんですけれども、導入に当たって。そういうのは市長、お考えは何かありますでしょうか。地域振興について。

【市長】 とりわけ、例えば検査制度を新しいやつでどうぞというのなら、そういう地域振興もという話が出るかもしれません。現在、先ほど言いましたように全くそういうのを決めていない状況ですから、直ちにそれによって地域振興ということは考えていません。ただ、より良い安全性の向上する検査制度になればというふうに思います。

ただ、検査制度自体もかなり長い昔からの制度のままで来ておりますし、最近、高経年炉も増えていますから、そういうものに対応できる制度にすべきではないかとは思っています。

【記者】 今のに関連してなんですが、保安院のほうは経済性、先ほど市長は最低でも今の基準はクリアしてほしいという話をしましたけれども、そういうことは考えないという話はしていて、安全になるということは考えるけれども、はっきり地元の経済というのは私たちが考えることではない、それは電力事業者の考えることであってというような話をしていますけれども、結局でも国の制度であって、向こうは地元の理解がない限りは導入しないと。とすると、なかなか落としどころが見つからない話だなというふうに思っていて、どういう……。

【市長】 だから、より安全性を確認することに近づく制度になるということと、それは良いことです。それはよしとして、しかし経済的にはかなり落ち込むよとなると、美浜町で話が出たように、落ち込んだ分を最低でもカバーする地域振興というのは必要になると思います。最低でも現在まで来ている基準を下回るようでは、地元の皆さん方も大変ですから、どのぐらい下がるか分かりませんが、下がった分は地域振興として求めていくのはごく自然の形ではないかと思うんですけれども。

【記者】 美浜の議会でも割と強硬な意見が出ていて、市長はずっと全原協で検討の段階から携わっておられると思うので、制度の内容に関しては大分お詳しいと思うんです。その中で、より安全になるということがいまだに市長はまだはっきりと分からない、分かりづらいという部分があるというふうに考えていいのでしょうか。

【市長】 非常に実はああいう会というのは専門的な、大学の専門の先生とかがやるものですから、実は非常に分かりにくいんです。ただ単純にいうと、動かしながら検査をしたほうが良い部分もあると。ああそうかなという気はします。ただ、すべてを止めて、止まったことによって検査をして、また動かすというよりも、動きながらする部分があれば、そういう制度も導入すると、要するに運転中でも検査しますので、またそういう検査官も入ってくる。

経済的な話で、僕が聞いた限りでは、ばらけると。今までは休んで3カ月の定検、集中していたやつを年間ある程度分けていけるので、その時期は落ち込むかもしれないけれども今までなかった時期には入ってくるので、平均するとそう変わりませんよということなどは聞いたんですけれども。そういう点で、そういう説明をされればなるほどなという部分はありましたが、技術的な細かい部分は確かに分からんもので、そのあたり恐らく一般の方もわかりにくいでしょうから、今、国に、その分かりにくいところをともかく分かりやすく説明してくれということをお願いしています。

【記者】 安管協の場でも地元の了解なくしては絶対に導入しないということは明言されていて、ただその後、議会レベルの了承を取りつけるつもりがあるのかといたら、それは考えていないと。そうすると、やはり市長のご判断、お気持ち一つで地元の了解を得た、得ないというのが決まると思うんですが、今の段階でもう大分お詳しいはずの市長は、今

の時点でどういうふうにとらえていらっしゃるか。

【市長】 私は、先ほど言いましたように、より安全になっていって経済的なものが落ちなければ、ある程度はいいのかなと思うんですが、ただ、そういう細かい部分の説明をやはり市民の皆さん方に一度してくれと。議会のほうはお願いしましたけれども、それである程度また市民の声とかが上がると思いますので、それを見極めてから判断したいなと思っています。

【記者】 そうすると、先ほどの話と総合すると、より安全になるということはある程度認識されている。というのも一理あるというふうにおっしゃっていましたが。

【市長】 一理はある。

【記者】 そうすると、あとはどういうふうな形で地域振興をカバーしてくれるかというところが市長としてイエスかノーかの判断になるということではないですか。

【市長】 長い目で見た場合の経済的なダウン、これは避けなければならぬと思うんです。なったけれども、ただでも今、地方自治体、この景気の悪いときに、また落ち込むというのは非常に気の毒なものですから、それは避けたいと思っています。

【広報広聴課長】 よろしいですか、この2件についてご質問等は。

それでは、3番目の質疑応答に移りたいと思います。

初めに、幹事社さんお願いします。

【記者】 新年明けましておめでとうございます。幹事社の産経新聞の伊豆丸と申します。本来なら福井放送の藤井支社長がされる筋合いのものですけれども。

今年も新年からえらく寒くて、雪も降って、今後の敦賀市の課題なり何なりを暗示するようなひどい年明けだったんですけども、先ほど市長が挙げられたように北陸新幹線にしろ拠点化計画にしろさまざまな課題がある中で、やっぱり何はさて置き、もんじゅとは思いうんですけども、これから10カ月、お互いにそれぞれの立場で忙しくなるでしょうし、動き出してからもまたそれぞれの立場でいろんな対応に追われると思いますが、その節はお互いに時には協力、時にはお互い批判し合いながら頑張っていきましょう。どうぞよろしくをお願いします。

【広報広聴課長】 何か質問ありましたらお願いします。

【記者】 連携大学、大学院構想のお話をおっしゃっていましたが、駅の周辺策定整備委員会のときに福井大の先生が、要するに研究科クラスの規模というふうにおっしゃっていて、それは別に私は、工学研究科の科長さんがたしか今そういう委員会の立ち上げをされているんですね。直接それにはさわっていませんけれども、一大学教授の立場からして多分ほぼ間違いないとは思いますがというふうにおっしゃっていて、工学の研究科ということでは多くて80人ぐらいであろうと思います。実験の設備を若狭湾エネルギー研究センターのほうで使うのであれば、要するにあそこはそんなに大きいものにはならないなと思うんですけども、市長は、その規模はそれぐらいで別にいいと思っいらっしゃるんですか。

【市長】 規模的にはやはり多くの皆さん方に来ていただくのが希望ですから、そういう一つの研究班もありましょうし、またエネルギーですから原子力関連、また外の分野のエネルギー関係の研究とか、ある程度複合的な大学で、福井大学は福井大学の特徴、京都大学は京都大学の特徴、外の大学の特徴というのがありますので、できましたらより多くの学生の集まる連携大学にはしていただきたいなというふうに思っています。

80人程度ということでありましてけれども、できれば300人以上の規模の大学ができれば一番良いなとは思っています。

【記者】 80人というのは、私のいた研究科でもそれぐらいの人数だったというだけの話ですが、それはいろいろあると思いますけれども。

それと、そのときの委員会の中のやりとりで、委員の方の発言としては、例えば箱物をつくって客が来ないで維持に苦しむというよりは、大学院をつくれれば学生は来るわけだから、より良いのではないかという意見がたしか女性の方から出されていたと思うんですけど

れども、その後、川上先生は、入り口と出口の問題があって、例えば300人ぐらいの人が毎年出ていったとあって、今、要するに原子力でそれだけの就職先があるのかというようなことを暗示されていて、実際に原子力、直接原子力工学とか核工学とかが必ずしも必要な部分というのは、そんなに実際にプラントの中では多いわけではないですよ。そのあたりというのはどう思われますか。

【市長】 これはおっしゃるとおりでして、一時は京都大学の原子力工学科がなくなった、名称変更したということもありまして、原子力自体は少しそこを勉強しよう、勉強しても行くところがないという現状が続きましたけれども、日本国内だけを考えれば今でもそう多くのたくさんの技術者がどんどん要するというものもないと思います。もちろん最低必要な人数はこれからどんどん世代も交代していきますので必要だというふうに思います。またしばらくすると空白の期間がありますので、ある程度大量にまた必要な時期が、もうそう遠くない時期に出るとということも聞いておりますので。

それと、国内のみならず、私もいつも言っておりますけれども、やはり外国からの学生を集める。というのは中国でありますとかいろんな国が原子力に対しては前向きに取り組んでいる状況でありますので、世界に人材を発信する連携大学にしていきたい。

私ども、魅力あふれる国際交流都市ということでもありますので、原子力を含めたエネルギーと交流のまち敦賀、第5次総合計画の魅力あふれる交流都市にもつなげていける外国の学生も多く集める大学にしてほしい。そのために京都大学なりそういう名前も必要かなと。そういう力が必要かなというふうに思っています。

【記者】 原発で新型転換炉ふげんのことなんですけれども、年末に原子力機構が結果をまとめまして、結局、施工不良というか、当初30年以上前の建設当時にそういった不手際があったということで、それについてどう思うかということと、恐らく原子炉建屋でも同じような工法でつくられているので、建物そのものの強度には影響はないにしろ、一部原子炉建屋でコンクリートの強度が不足している可能性もあるんですけれども、それについてどうお考えでしょうか。

【市長】 ああいう原子力の建物ですから、強度不足があったということに対しては非常に遺憾だなというふうに思います。確かに35年前ということであるのと、最初、強度不足と聞いたときに不安とか心配になったのが、例えば業者がそういうところで、よく心配になってくるのは手を抜いたとかいろんなそういう問題がひょっとして絡んでいるのではないかと不安になったんですけれども、内容等をお聞きしますとフライアッシュの入ったコンクリートを使ったと。そのいろんな使用の仕方というか乾燥時間をかけるとか、かけんとか、いろんなそういう問題があって、ああいうことになったということで、最初の疑念というかそれは払拭したんですけれども、やはりそういうことがないように。

私ども、外のプラントもたくさんありますから、外は大丈夫かなという心配もして、いろいろ調査も当事者もしたようでもありますけれども、外はそういう心配がないということでありましたので安心はしたところでもあります。

これはふげん特有の一つの問題ではありますが、そういうことはないにこしたことはないなど。やはりしっかりした、強度の不足しないしっかりした建物につくってほしかったなという気持ちはあります。

【記者】 さっきの議題に戻るんですけれども、連携大学院の話なんですけれども、ことしから検討委員会みたいなものの議論というのが本格化すると思うんですけれども、市としてはどのように関与していきますか。例えば先ほどの人員とか規模的な市長がおっしゃった300人ぐらいはみたいな要望も検討委員会の中に載せていくというようなことも考えていらっしゃるんですか。

【市長】 大学の委員ではないということですので、委員にならせていただければその中でばんばんやるんですが、そういう委員会の中に敦賀市として先ほど言ったような要望ですか、こういう形をお願いしますということは伝えていきたいと思います。

【広報広聴課長】 あとよろしいでしょうか。

【記者】 今、旧敦賀港駅舎で展示されている人道の港展のことで、春に大和田別荘のほうに移るといことなんですけれども、そのあたりの準備状況というか進捗状況をお聞かせいただきたいのと、以前、ユダヤ人のビザを持っているイスラエルにいらっしやるということで、できれば敦賀に呼びたいというふうにおっしゃっていたと思うんですけれども、そのあたりの状況を教えてください。

【市長】 大和田別荘への移転は順調に進んでおるようでありまして、展示等についてももうじき本格的に取りかかると思いますので、3月末までにはちゃんとしたものができるというふうに思っております。

それと、ユダヤ人の方のビザでありますけれども、いろいろ調査しまして、本来ですとうちから担当者が出向いて行って直接ということをおもっておったんですが、なかなか国情がああいうところですので行きにくいということもございまして。そこで旅行社の方を通じて、昨年の12月にその旅行社の方が出張しましたので、イスラエルへ。そこで現地で確認をして報告受けたんですけれども、前言っていた方は写真しか持っていなかったと。ビザの写真しかなかった。でも、その人は間違いなしに船で敦賀には着いたんですけれども、3歳かそこらに着いたんですけれども、その人は写真、現物は持っていないということが分かりましたので、また何人かいらっしやいますから、その次の方に当たっていききたい。本当は、本来なら去年の時点では開館のときにオープンの式典にぜひ来ていただいて、最初は本物のやつを飾らせていただいて、あとはどうしてもという方はレプリカをつくって展示させてもらおうと思っておったんですけれども、持っていらっしやる方が写真ということでもありますので、写真をもとにつくってつくれんことはないんですが、できれば本物を今目指していますので、もう一度探していききたい。何人か、数人はいらっしやるという情報がありますので、地道に探していきます。

オープンのときには間に合わんと思うんですけれども、またいろんな機会でもしそういう方が見つければ、ぜひ持ってきていただきたい。

ただ、これが1年先、2年先といいますと年齢的にも若くないものですから、その辺はどうするかということはまだ判断する時期はあります。現に敦賀に上陸された方はいらっしやいますので、そういう方が六十数年ぶりに敦賀へお越しをいただくということは、またイベントの中では考えていきたいなと思っております。

【記者】 1年、2年先になっちゃうというところなんですけれども、数人いらっしやる中で、ある程度、現段階でめどというか目星、次はこの人に行ってみようとか、そういう目星はついているのでしょうか。

【市長】 2人ぐらい名前は上がっているらしいので、その人に今度は地道に当たります。

【記者】 ちょっと話を戻して恐縮ですけれども、先ほどの大学院構想の中の検討のほうで、要望は述べていきたくいとおっしゃっている内容は、市としては300人以上ぐらいの規模とかがいいですよということもおっしゃっていきたくいということですか。

【市長】 そうです。

【記者】 おっしゃっていた検討委員会的な組織というのは、福井大学の学内組織の話をおっしゃっているんですね。

【企画政策部長】 福井大学が中心になって、京都大学、大阪大学、それに名古屋大学、その関係者で検討委員会をつくるという形でございます。

【記者】 昨年の11月末の定例記者会見の後の話だったので、今お聞きしたいんですけれども、看護専門学校の答申がありましたでしょう。それで、短大との合併ということについて結構現実的な話ではないかというふうに報告があったと思うんですけれども、改めてその点については市長はどうお考えか。つまり結構メリット、デメリット、両方併記していますけれども、読む限りメリットがあるように読めるんですけれども、市長はどう思っいていらっしやいますか。

【市長】 これは看護専門学校のみの話でなくて、敦賀短期大学との話も出てまいりますので、私が両方、理事長とまた市長としての管理者でありますから、特に統合ということ

については検討しやすい立場にありますので。短大のほうも今回の新しい音楽系、またダンス系のユニットを入れたことよっての学生が4月にはっきりするわけでありまして、それはそれで残しながら、本当に今の短大の中でもう一つの学部、看護学部ができるかということ十分に研究をしたいなど。

専門学校と大学になりますと教員が全然変わってきますので、その辺の、それだけの教授、准教授等が確保できるかという問題もありますし、それと、今の看護専門学校から比べると学費というのは相当高くなります。そうなった場合の定員がしっかり確保できるかということ。いろいろと検討委員会の中でもそういうことは市場調査、今の子どもたちの意向も踏まえてああいふ結果が出ておりますので、十分に時間は、余り時間かけるわけにいきませんから、今年中ぐらいには結論といいますかそういうものを出していかないかなのかなと思っています。

【記者】 新年なのでお聞きしたいんですけれども、午前中は原子力機構の敦賀本部で早瀬本部長があいさつしての年始式がありまして、今年のもんじゅの年ですというふうに職員の皆さんに訓示されておりました。あと、いわゆる反対なさっている住民の方たちも、今年も勝負の年だと。もんじゅを止めろという意味でだと思いますけれども。そういう意味で、かなり激突の雰囲気は高まってきていると思うんですけれども、市長としても就任なさった後に、その年の年末にあの事故が起きて、現場に駆けつけられたときのことなどよく記事とか本とかにも出てきますけれども、今改めて、もしかしたら13年ぶりに10月に動くのではないかというのは、世界には例がないことですし、市長としてもさまざまな思いがあると思いますが、年頭の今の思いというのを聞かせただけでないでしょうか。

【市長】 年末にも原子力機構の皆さん方にもごあいさつして、来年はもんじゅイヤーになりますと。イヤーと伸ばすと、下を取ると「もんじゅイヤ」になるで、それは関係者としては余り、「もんじゅの年」にしたほうがいいんじゃないですかと私は言ってしまったんですけれども。反対の皆さん方にとっても正念場、また国にとっても一つの正念場の年ではないかというふうに認識をいたしております。

私が市長になってからすぐに起こったことでありますし、もんじゅの事故とともに市長を続けておるといふような感じでありまして、そのもんじゅがいよいよ動く動かない、動かすのかどうなのかという議論が出るということは感慨ひとしおのものがありますけれども、これから国の、今いろんな検査をやっておりますので、安全性に対する検査をしっかりと見極めて判断をしなくてはならぬというふうに思っています。

【記者】 看護専門学校のことなんですけれども、答申を受けた後に、たしか市の部長さんが4月には市の方針を、ある程度方針を示して委員会を立ち上げるとおっしゃっていたんですけれども、先ほど1年とおっしゃいまして、その時点で、市長としても短大との合併も含めた方向性というのはある程度出されるのでしょうか。

【市長】 その委員会の中でやはり議論をしていって、単独で、恐らく私は思うんですけれども、こんな小さいまちに看護短大なり大学があつて、また敦賀短期大学があつて、2つも持っていくというのは至難のわざかなと思うと、やはりおのずから統合して一つの短大の中に看護学科ということをつくるのが一番考えられやすい一つのシナリオかなというふうに思っていますが、そのシナリオも含めて先ほど言いましたように学生の確保がどうなのか。恐らく今、両方でご承知のように3億以上のお金が投入されておりますので、それが統合することによって、もちろん授業料も入ってきますし、また反面、先生方に対するいろんな出る部分もあるんですけれども、それと2つになった相乗効果。要するに、にぎやかな大学になりますから。看護学科もあり地域総合学科もありますから、そういう意味で、そういういろんな相乗効果も図れるのではないかという、そういうものをしっかりと研究をして、その委員会の中で研究をして、今年中ぐらいには結論を出していきたいなと思っています。委員会の中で議論をしていただいて。

【記者】 今の市長のご意見、素直に聞いていると前向きにとらえてよろしいのでしょうか。

【市長】 いや、これからしっかりと研究をします。

【広報広聴課長】 後、質問よろしいでしょうか。

【記者】 新幹線について伺います。

敦賀までの一括認可。今日の市民交流会の高木代議員、紆余曲折あるかもしれないとおっしゃっていましたが、現時点で手ごたえというか、どのように受けとめて、これからどうされるのか。

【市長】 私どもとすれば、山崎先生がメンバーに入っていたいただいたというのは大きな期待を持っておりますし、山崎先生も私どもも何度か東京へ足を運びまして新幹線のことで行ったんですけれども、かなり強い意欲を持っておられますので、私どものいろんな期待には必ず、今、参議院幹事長というお立場でもありますので、恐らく大きな力を発揮していただいて、良い方向に出てくるのではないかと期待はしております。

ただ、やはり私どもも今までどおり、今まで以上にそういう点では運動展開、やはり地元も一生懸命やっているという姿勢を国のほうに、また関係の皆さん方に今一度お訴えをする、そういうような運動はしっかりやっていきたいと思っています。

【記者】 そのほかで、もんじゅの運転再開みたいなことを取引材料ではないんですけれども、ちらつかせるみたいなこともあり得ますか。

【市長】 私は基本的に、いつも言っていますけれども、原子力発電所があろうが、もんじゅがあろうがなかろうが新幹線は必要なものなので、基本的には今までも言っていますし、これからも全く別問題だというふうに思いながら取り組んでいきたいと思っています。新幹線は、何遍も言いますが、もんじゅがあってもなかつても敦賀にとって必要なものだと思いますので。

【記者】 今の関連なんですけれども、今まで以上の運動展開を国に対して示していくと。例えば、もう一度、年度内に夏にやったような大会を開くとか、そういったどういうふうな動き、具体的な動きは。

【市長】 やはりそういうアピールというのは特別考えてはいないんですけれども、各プロジェクトチームの検討委員会の先生方、また新たに山崎先生を含めてなりましたので、そういう先生方に地元の熱意というものを訴えていく必要があるのではないかと思います。それはまた県と連携をとって一緒に行動はしたいと思っています。

【記者】 今の新幹線に関連して、駅前の周辺整備の件なんですけれども、駅舎、それとロータリーの広場ですね。一旦宙に浮かせた形になっているんですけれども、先般の駅周辺整備構想策定委員会の中でも、やはり止めるべきではないのではないかとというふうな委員の声はまだ根強く出ていたんですけれども、新幹線の問題と絡めて、いつごろどういう時期に駅舎を再度スタートさせるような時期がいつごろになるか。その辺どうお考えでしょうか。

【市長】 やはり新幹線の今回の中で敦賀まで認可が下りるのか下りないのかで、かなり変わってくるというふうに思います。下りた場合には新幹線の駅との整合性をとっていきませんと、十数年でできるわ、また駅を新しく後ろにつくるようなことあっては非常にもったいない話になりますので、やはりよく検討しなければなりません。仮に認可がおりんとなりますと、相当、次に新幹線が来るのはかなり時間がかかるということでもありますので、そうなれば今までの計画どおり今の場所で建てかえをしなくてはならないというふうに思います。

今の駅が50年使いましたから、次の駅もせめて30年から50年ぐらいは使用せまないと非常にもったいないというふうに思いますので、今年4月までに、今年度中にいろんな結論が出ることも踏まえて、どうすべきかということをしっかり考えたいと思います。

今はその状況待ちということもありますので、直ちに駅をやらない、やるというのは今ちょっと言えないのも現状です。

【記者】 あともう1点いいですか。

市立敦賀病院なんですけれども、あちらのほうもあり方検討委員会のほうから全部適用

も選択肢の一つというふうな方向性が示されましたけれども、その辺、改めてもう一度、年を振り返って市長のお考えを聞かせてください。

【市長】 答申をいただきましたので、それは重いものでありますから、それをしっかりと受けとめていきたいと思えます。

賛否両論といいますか、指摘の中でも全部適用も一つであるということでもありますので、全部適用がすべてではないわけでありますから、そのあたりをしっかりと見極めて、やはり良い形で病院改革を進め、地域の中核病院として信頼される病院づくりというのは邁進しますが、議会でも出ておりましたように、不採算部門は全部切って、要するに利益の上がるどころだけというわけには、私ども公立病院はいきません。必ず不採算部門というのはありますし、それが地域の中核病院の一つの役割でありますので、そこらも踏まえて、しかなるべく赤字の少なくなるように。黒字にはなかなか難しいでしょうけれども、税金を投入しなくて済むような形の経営には中核病院の使命を果たしながら持っていけるように、答申内容を踏まえてしっかりと努力したいと思えます。

【記者】 たしか12月には、また医師の確保ということで、たしか行かれたんでしたっけ。

【市長】 行ってまいりました。

【記者】 いかがでしたか。

【記者】 年末のごあいさつも兼ねまして、金沢と福井大学のそれぞれの先生方にお会いして、しっかりとお願いをしてきたわけでありまして、そういう先生方のお力もあって、減るようなことはないと思えます。ひょっとすると少しでも増えていくのかなという期待は持っておりますので、引き続き金沢、また福井大学の皆さん方としっかりと連携をとって、医師不足解消に向けては最善の努力はしていきたいと思っております。

【記者】 それは手ごたえとしてあったということですか。

【市長】 まあ何とかいけるんじゃないかなという気持ちは持っております。

【記者】 もうすぐ年度は、あと3カ月ぐらいで変わりますけれども、来年度からだと思いますが、地方財政健全化法に伴って、自治体の連結赤字で財政力を見ていこうというのが本格的に始まると思えますけれども、いずれかは多分そういうのは私たちにも示していただけるのかなと。つまり、単体ではなくて、いろんなところを合わせて、言ったら悪いですけども赤字の施設とかあるのも含めて財政力を見ようという考え方がこれからは主流になっていくと思えますけれども、それでも多分敦賀は大丈夫なほうかなとは思いますが、そういうのはいずれお示しいただけるのかなというのは次回までには……。

【総務部長】 今年の20年度の当初予算の要求方針は各部、各課に指導はしております。ただ、今おっしゃったように連携ということで直接はしておりませんが、今おっしゃる連携は多分、上下水道の値上げの話であるとか病院の話であるとか、それから一般会計の話とひっくり返しての話だと思えますが、20年度の当初予算はもう既に実は財政課長の査定を始めております。また、来週から部長査定を始めていきます。総体的には95%ぐらいの、10月の予算の95%ぐらいで、残りの5%はいわゆる新規事業あるいは緊急を要する修繕費に回していこうというふうな指示はいたしております。

以上です。

【副市長】 連結決算は。

【記者】 多分、来年度ぐらいだと思いますけれども、そういうふうなあれがありますよね。また教えていただきたいと思えます。

【記者】 また全然話は変わるんですけども、昨年、木崎のレジャー施設がめでたくオープンして、市長、まず行かれたかどうか。

【市長】 ボウリングする機会がないもので行っておりません。息子らが行ったといったかね。結構待ち時間があったとか。

【記者】 僕はオープン当日に行ったんですけども、ボウリングをやっている人はだれもいなくて、ボウリングをやりたいと言っていた人はだれだったのかなというのが結構気になってはいるんですけども。まだ訴訟を県のほうとやっている絡みもあって、なかなか

か難しい話だと思えるんですけども、改めてああいう形でオープンしたことで、市長の感想をお伺いしたい。

【市長】 私どもも従来から言っておりましたけれども、場所的にはできればほかでオープンしていただければありがたかったですけれども、もうできてしまいましたから。後は、交通事故とかいろいろなお話が出ていましたけれども、車もたくさん出入りする、そういう安全の問題。そういうものはしっかりやってほしいなと思うだけです。

【記者】 例えば仮に事故が起きてからでは遅いんですけども、起きたときにはどういうふうに。何か対応は考えていらっしゃるのか。

【市長】 恐らく警察のほうでもあそこの信号の話とかそういうのは出ているというふうに思いますので、そういうやつは、そういう箇所があそこだけに限らず、まだ市内にたくさんありますので、危険度の高いところから整備はしてもらえるとというふうに思いますが。

でも今の話の中で、例えばパチンコ屋さんのほうとかあちは、そんなにどんどん入っているようなふうでもないということで、あそこが例えば渋滞を起こして交通に支障を来しているということは聞いておりませんので、極めてスムーズにそういう交通は流れているのかなとは思っています。

【記者】 11月にこの前の会見ありましたのでお聞きしたいのは、「熊谷ホテル物語」、市長出演なさっていたと思います。結構、関係者の方に聞くと予想よりは大幅に上回る入場者の方がいらっしまったということで、一つにはそのことに関して、余り私も知らない歴史を学ぶ良い機会だったなということで、市長の出演者として、もしくは関係者としての感想と、あとは、ぜひ再演をというような声が強くて、文化事業的なところで市として何か支援なさったりとかそういうのがあるのかなというところをお聞きしたいんですけども。

【市長】 後半のほうからで、まず文芸協会が今回支援していただいて、ああいう形でできましたし、私も稽古は2日だけ行って練習を見たりもしたんですけども、本当に皆さん方熱心にやっていましたし、もちろん演劇を経験した方もいらっしまいますし、全然経験ない方もいらっしました。プロも入っていただきましたし。実際、ステージの上で上がって、僕は15秒。1分ぐらいだと思っていたら15秒ぐらいしか出ておらななんですけれども、舞台裏のいろんな雰囲気とか、みんなが準備したり駆け回ってやるのを見まして、お芝居というのは大変だなと。映像ですと、ある程度、映画みたいに撮ってしまえば、後はいろいろいいんですけども、またカットして、そこで撮り直しがききますが、ああいうお芝居というのはぶっつけ本番でして、本当に素人の方からみんながあれだけ練習して熱心に取り組んで。見た人がほとんどがよかった、よかったというよかったコールが強かったもので、非常に関係の皆さん方にお礼申し上げたいなというふうに思います。

敦賀人というのは、どちらかというと案外引っ込み思案で、私が代表するように出たがりではない。地道にしておりたい性格なんですけれども、何でもやればできる性格を持っているので、敦賀人のすばらしさを発見しましたのと、もちろん演出でいろいろつくってあったんですけども、基本的には昔の敦賀にもああいうところがあって、それと特に欧亜国際連絡列車とのつながりがあったからああいうホテルもあったなあということを感じましたし、ああいう素材があるという敦賀でありますので、またこういうものをテーマとした芝居、1年かけて練習をされたそうですけれども、また文芸協会なりそういうところで応援をさせていただいて、市民手づくりの演劇であれだけの皆さん方が楽しんでいただければ非常にありがたいかなと。

昨日はRCNのほうでも再放送されておりましたので、結構多くの皆さん方に見ていただいたと思いますが、テレビで見るより生で見るのは全然迫力があって違いますので、ぜひまたそういうことが再演、またほかの物語が上演されたらいいなと思っております。

前のこどもミュージカルというのは、前やっていたいただいてよかったんですが、あれは隔年でやろうと。今年、たしかやりますので。また次の年は市民劇団で、また子どもたちのというような形で、1年に2つはできませんけれども、やれたらいいなと思っております。

【広報広聴課長】 後はよろしいですか。

それでは会見を終了いたしたいと思います。どうもありがとうございました。

【市長】 ありがとうございました。また今年もよろしく申し上げます。

午後 2 時30分 終了